



TITLE:

<論文>慶長遣欧使節通訳兼折衝役
シピオーネ・アマーティ--新出史料
に見る人物像とその役割

AUTHOR(S):

小川, 仁

CITATION:

小川, 仁. <論文>慶長遣欧使節通訳兼折衝役 シピオーネ・アマーティ--
新出史料に見る人物像とその役割. ディアファネース -- 芸術と思想
2016, 3: 63-81

ISSUE DATE:

2016-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/217008>

RIGHT:

【論文】

慶長遣欧使節通訳兼折衝役 シピオーネ・アマーティ

新出史料に見る人物像とその役割

小川仁

はじめに

慶長遣欧使節（1613～1620年）は、2013年に解纜400周年を迎え、それ以降も使節の訪問先であったメキシコのアカプルコやマドリッド、ローマ等において記念行事が順次執り行われ、使節への関心はなおも高まりを見せている。シピオーネ・アマーティ（Scipione Amati, 1583～1655?）は、慶長使節の通訳兼折衝役として、マドリッドからローマまで半年（1615年8月～1616年1月）に渡り一行に同行した。彼は後に *Historia del regno di Voxu del Giappone* (1615)（以下『伊達政宗遣欧使節記』と略す。）^{*1} と呼ばれる使節に関する報告書を出版、そして当時の日本の政治状況についてまとめた手稿（1616?）*Breve ristretto delli tre' stati Naturale', Religioso, e Politico del Giappone*（以

*1 *Historia del regno di Voxu del Giappone : dell'antichità, nobiltà, e valore del suo re Idate Masmune, delli favori, c'hà fatti alla Christianità, e desiderio che tiene d'esser Cristiano, e dell' aumento di nostra santa Fede in quelle parti.E dell'ambasciata che hà inviata alla Stà. di N.S. Papa Paolo V.e delli suoi successi, con altre varie cose di edificazione, e gusto spirituale de i lettori.. Dedicata alla Stà. di N.S.Papa PAOLO V.Fatta per il Dottor Scipione Amati Romano, Interprete, & Historico dell' Ambasciata.* In Roma, Appresso Giacomo Mascardi. MDCXV. Con licenza de' Superiori.

下「日本略記」と略す）*²を遺している。これらの文献は、慶長遣欧使節研究において重要史料として認識されてきたものの、アマーティの生い立ち・背景については、ほとんど顧みられることはなかった。

『伊達政宗遣欧使節記』によれば、アマーティはヴィットーリア・コロナ・デ・カブレラ (Vittoria Colonna de Cabrera, 1558~1633) の邸でタキトゥスに関する政治論文を執筆している折に、慶長遣欧使節の通訳兼折衝役に推挙されたとある*³。その上彼は、他の著作においてコロナ家を称揚する記述を残しており*⁴、これらの事実を鑑みた時、アマーティとコロナ家との間に主従関係があったことは明らかであった。そこで筆者はこれらに着想を得て、コロナ文書館でのアマーティ関連史料の調査を試みた結果、コロナ家歴代当主他に宛てられたシピオーネ・アマーティの書翰 163 通、アマーティが著した論文 (手稿) 4 点、アマーティが作成した公正証書 2 通、慶長遣欧使節の動向を伝える在ローマのコロナ家家臣の書翰 8 通、慶長使節から時代を 30 年遡り 1585 年に天正遣欧使節がローマを訪れた際の様子を伝える家臣の書翰をはじめとする関連史料 5 点を発見するに至った。

本論文では、はじめに日本では殆ど顧みられることがなかったズビアーコ (Subiaco) のコロナ文書館の沿革、蔵書について概観する。次いで、コロナ文書館において最近まで埋もれていたアマーティの新出史料を参照しつつ、アマーティの生い立ち、使節における役割を詳らかにする。その上で、これまで全く取り沙汰されることのなかった、コロナ家と慶長遣欧使節との直接的な関係性を、教皇庁、コロナ家、アマーティらの密接に絡み合った当時の動向から明らかにし、慶長遣欧使節研究に新しい視点を見出していく。

1 コロナ文書館

1-1 コロナ家とコロナ文書館

9 世紀ごろに創建とされるベネディクト会サンタ・スコラスティカ (Santa Scolastica) 修道院は、ローマより東に 80km ほど離れたズビアーコの、そこから更に山奥へ 5km ほど進んだ、深い溪谷と切立った岩山に挟まれた場所に築かれている。

.....
*² Scipione Amati, *Breve ristretto delli tre' stati Naturale', Religioso, e Politico del Giappone, fatto, et ordinato dal Dottor Scipione' Amati Romo interprete', e' Relatore dell' Ambasciata del Re' Idate' Masamune' Re' de Voxu regnāte' nel Giappone*, ヴァチカン文書館蔵、ボルゲーゼ文書 I, 208-209, 51r-90r,

*³ 「伊達政宗遣欧使節記」『仙台市史特別編 8 慶長遣欧使節』所収、2010 年、71 頁；原文、Al Lettore 参照

*⁴ Scipione Amati, *Laconismo politico sopra il consiglio di coscienza, che combatte la ragione di stato*, Roma, L. Grignani, 1648, pp.1-4.

オルシーニ家とともにローマの一大有力家系であったコロナ家には、中世以降に作成された公正証書や書翰が十分な整理もされないまま保管されている状態にあった。そこで、レパント海戦時の教皇庁艦隊司令官として名を馳せたマルカントニオ・コロナ2世 (Marcantonio II Colonna, 1535~1584) が、1562年にコロナ家の本拠地*5であったパリアーノに文書館を設立するよう、家臣のニコロ・ピスカニ (Nicolò Pisacani) に命じたのが、コロナ文書館の発端とされている。続いて1634年にはフィリッポ・コロナ1世 (Filippo I Colonna, 1578~1639) がシピオーネ・アマーティ及びコスモ・ボンテンピ (Cosmo Buontempi) に文書館の再整理を命じた。

19世紀中葉にはコロナ家に遺産相続争いが発生し、それにより文書館史料は離散を余儀なくされている*6。その一部がバリベリーニ家に渡った一方で、ほとんどの史料はローマのコロナ邸に引き取られることとなった。これらの文書整理に多大なる足跡を残したのが、トマッセッティ (Tomassetti) 父子である。ローマ郷土史研究の第一人者であった父のジュゼッペ・トマッセッティ (Giuseppe Tomassetti, 1848 ~ 1911) は、ローマ都市史を研究する者のあいだで現在でも大著とされている『ローマ近郊史—古代・中世・近世—』 (*La Campagna Romana antica, medioevale e moderna*, 1910, E. Loescher) を執筆、その際に使用した関連史料に限り、息子フランチェスコ (Francesco) とともにコロナ文書館史料の「歴史雑録」 (Miscellanea Storica)、「III BB 文書群」の一部、「IIIAA 文書群」の索引並びに索引カードを作成したのであった。

コロナ邸に移されたコロナ文書館史料は、1998年、イタリアの文化財・文化活動省主導の下、ズビアーコのサンタ・スコラスティカ修道院へと移管され、今日に至っており、ヴァチカン枢密文書館 (L'Archivio Segreto Vaticano) にも、18世紀を中心とした会計文書の一部が未整理の状態でコロナ家バンドル (Fondo Colonna) 全105巻として保管されている。なお、バリベリーニ家に渡った史料は、現在ではヴァチカン図書館 (Biblioteca Apostolica Vaticana) バリベリーニ文書に収蔵されている。*7

*5 コロナ家にはナポリ近郊やシチリア、カラブリア、アブルッツォ等に傍系が数多く存在している

*6 パリアーノを中心としてローマ東部に一大所領 (Feudo) を形成していたコロナ家は、その所領内の多くの拠点都市、ジェナッツァーノ (Genazzano)、ポフィ (Pofi)、カーヴェ (Cave)、トリヴィリャーノ (Trivigliano)、マリーノ (Marino) 等々に集積されていた文書群を順次パリアーノに集約していったが、ザガローロ (Zagarolo) やパレストリーナ (Palestrina) のように、後に他家へ邸宅と所領が引き渡された際や、遺産相続争い以外でも文書群は離散していることから、現在のコロナ文書館にコロナ文書群が隈なく収められている訳ではない。

*7 Pietro scatizzi, *Consigli per le ricerche d'archivio riguardanti la famiglia colonna*, <http://www.clavisaurea.it/main/archivio-colonna>

1 - 2 目録とバンドル

コロンナ文書館の目録システムは、不完全なうえに、何度も改編が加えられた複数存在する請求番号のため、極めて複雑であり、不幸なまでに把握が困難といえる。現在では目録の再編纂、文書整理がささやかに進められており、一日も早い完成が待ち望まれている。以下『コロンナ文書館ガイド 2005』^{*8}に沿いながら、目録の概要を確認していきたい。

「一般索引・一般目録」集 (L'Indice generale. L'Inventario generale) 12～20 世紀
ここに収録されている史料の殆どは、文書館員にして修道院長のプレスutti (Presutti) によって整理 (1867～1871 年) されている。コロンナ家の所領毎 (カーヴェ、ジェナツァアーノ、パリアアーノ、ポフィ、トリヴィリアアーノ等々) に分けられ、それぞれに雑録 (Miscellanea)、法律文書 (Posizioni legali)、書翰 (Corrispondenza) の3種類のバンドルが収められている。なお、ここには不完全な形態で未だ不明な点が多い IV 文書群、III AA 文書群の補遺も収められている。

「歴史雑録」集 (Serie: "Miscellanea Storica") 11 世紀～20 世紀
この目録には、コロンナ家の家系に関わる史料が収められている。18 世紀の文書館員、続いてプレスutti がコロンナ家の歴史にとって重要な史料をここに収め直した。

「公正証書・III AA」文書群 (Istrumenti: Serie III AA)
公証人によって作成された公正証書が収められており、プレスutti とトマゼッティが見出しを付し、目録を作成している。

「III BB」文書群 (Serie: III BB) 3～19 世紀
18 世紀の典型的な整理・分類方法でまとめられており、外交分野を中心として、爵位や財産に関する史料、コロンナ家領内の行政証書 (許可証、聖職祿証書等々)、コロンナ家に発行された贖宥状、他の豪族との外交史料を収蔵している。後年になってトマゼッティ父子が独自の請求番号を付して整理したのは、先に述べたとおりである。

「書翰」集 (Serie dei Carteggi) 16～19 世紀
コロンナ家の主要な人物 34 人に宛てられた書翰のほとんどが、ここに収められている。以前は宛名毎に請求番号が付されていたが、現在では請求番号は廃されている。各書翰は

.....
^{*8} *Guida all'Archivio Colonna*. このガイドは、コロンナ文書館の目録データベース内に付されている。

宛先のコロンナ家の人物毎に分類され、さらに差出人のアルファベット順に整理されており、これらは一定の大きさの函に順番に収められている。このようなシステムにより、調査したい宛先の人名と差出人を指定すれば、文書館員によって容易に出納されるようになっている。各人物の函数は様々であり、17世紀初頭の家長にして、後のコロンナ家の繁栄の礎を築いたフィリッポ・コロンナ1世 (Filippo I Colonna, 1578-1639) のような人物は、書翰の遣り取りも活発であったため、書翰が収められている函数も10函を軽く超える。

「評議会」集 (Serie: Congregazioni) 18世紀以降

請求番号 IAB で形成されており、18世紀末から19世紀全般を通してのコロンナ家内で執り行われた財政、財産管理等に関する会議の議事録が収められている。

「手稿本 (コロンナ図書館蔵)」集 (Serie: Codici, Manoscritti della Biblioteca Colonna)

13世紀～19世紀

コロンナ家に関する議論、手稿が収録されており、そのほとんどが手稿である。ここに収録されている史料は、かつてパリアーノにあったコロンナ家図書館に収蔵されていた。コロンナ家図書館目録に収録されている文書なかには、現在まで残されていないものも非常に多く存在する。それら文書は、図書館が各地を転々しているうちに、売却されたものと思われる。472篇に及ぶこれら手稿群は、19冊に製本・分類・保管されており、断食についての論文、詩歌、蔵書目録、政治論文、チェスの指南書、書翰、外交使節団報告、地理書、海図、議事録といった具合に実に多彩な陣容を示している。

「文書館旧索引」 (Serie: Rubriche antiche d'archivio)

シピオーネ・アマーティとコスモ・ボンテンピが1630年代に文書館を再編した際に、この様式の索引の編集に着手した。後にこの索引は18世紀まで更新され続け、史料が随時追加された。

「ローマ・ラツィオ雑録・訴訟雑録」集 (Serie: Miscellanea Roma e Lazio, e Miscellanea Cause)

プレスツェティにより再整理が進められていたが、1871年に未完成な状態で中断を余儀なくされ、現在でも複数の請求番号が存在する。「ローマ・ラツィオ雑録」には13世紀から20世紀初頭にかけての、コロンナ家が支配していたローマ周辺都市の様々な文書 (基本法令集 (Statuto)、葡萄・小麦畑の管理報告、教会財産目録、聖堂や要塞普請に関する報告) 等が収められている。一方で「訴訟雑録」には16世紀から19世紀に至るまでの、各所領の訴訟記録、教会財産目録、土地売買をめぐる文書、覚書等が保管されている。

1-3 コロンナ家とシピオーネ・アマーティ

シピオーネ・アマーティとコロンナ家との間に主従関係があったのは、冒頭でも述べた通りである。筆者は1600年代～1650年代にアマーティが認めた書翰・報告書を調査するのに、6年の歳月を費やしており、その作業は2016年現在も継続中である。本項では、筆者がコロンナ文書館で発掘したアマーティ、慶長遣欧使節関連史料、ならびにその調査の過程で発見した天正遣欧使節関連史料も併せて概観する。

「歴史雑録」集

アマーティ著、政治論文（ラテン語手稿、1615年）*⁹。

アマーティ著、マルカントニオ・コロンナ2世に関する著作の構想メモ（イタリア語手稿、1609年）

「IIBB 文書群」

アマーティ著、トリヴィリャーノの聖職禄に関する請願書（イタリア語手稿、1625年）
発教皇ウルバヌス8世、宛アマーティ、聖職禄に関する書翰（ラテン語手稿、1638年）
財産に関する証書（イタリア語手稿 1646年）

「書翰」集

1609～1653年の期間にアマーティよりコロンナ家当主フィリッポ1世、マルカントニオ・コロンナ・ジョーエニ5世（Marcantonio V Colonna Gioeni）、枢機卿ジローラモ（Girolamo Colonna, 1606-1666）、等に宛てた書翰が総計138通存在する。幾通かの書翰には、アマーティとボンテンピによるコロンナ文書館再編に関する記述が認められる。また複数のコロンナ家家臣がフィリッポ1世に慶長使節のローマ滞在の動向を伝える書翰が6通、1616年1月にローマのアラチェリ教会上長が、フィリッポ1世の妻ルクレツィア・トマチェッリ・コロンナ（Lucrezia Tomacelli Colonna）に宛てた、慶長遣欧使節へ贖宥とメダリオを贈る旨を述べた書翰、慶長遣欧使節を日本より引率してきたフラン

.....
*⁹ *Pro Italico Arumorum Motu, Ad Hispaniarum Regem, Ad Sabaudia' Ducem, Ad Italia' Principes, Parantica Sententia, Propositiones disputativa', ex ed collecta XXXVI. Scipione Amati V.D. Illmi. D'ni Don Petri Celestris Santae Crucis Marchiones E' questris Ord Sa'cti Jacobi Bellici Reg' Maiestatis Cathca. Consiliarij: Magni Sicilia' Questoris: ac eiusd. Regni ad Sane Hispaniaru' Regia' Oratoris Ab Epistolis.* 請求番号 IIA 56 12

シスコ会士ルイス・ソテロ（Luis Sotelo, 1574-1624）がフィリッポ 1 世に宛てた、使節への手厚い援助に対する礼状等、多くの慶長遣欧使節関連史料が保管されている。一方で枢機卿アスカニオ・コロナ（Ascanio Colonna, 1560-1608）の書翰バンドルには、1585 年 3 月～6 月にローマに滞在した天正遣欧使節の動向を報告するコロナ家家臣及び支援者による書翰が 4 通保管されており、この事実のみに鑑みてもコロナ家が継続して日本情報を得ていた事を窺い知ることができる*¹⁰

「一般索引・一般目録」集

カーヴェ、ジェナツァアーノ、パリアーノ、トリヴィリャーノ、ヴィーコ等の書翰集より、40 余通のアマーティが認めた書翰を発見した。（1615～1639 年）

なお、1615 年 12 月 8 日付でフィリッポ 1 世に宛てられたアマーティの書翰には、和紙と思われる材質の紙が使用されている。この書翰には、同時期にローマ滞在中していた使節の折衝役の仕事に忙殺されているため、アマーティのフィリッポ 1 世への謁見は叶わないものの、トリヴィリャーノ司祭長就任のための推薦状の執筆をフィリッポ 1 世に丁寧に願ひ出る旨が記述されている。当時のヨーロッパにおいて和紙は、非常に貴重で珍しいものであった。そのためアマーティは、使節随行員から譲り受けたのであろう和紙を、すかさず交渉の道具として主君フィリッポ 1 世への通信文に用いることで、主君の歓心を得ながら自らの主張を押し通そうとしたのではないかと推察することができる。

「手稿本」集

アマーティ著、タキトウスに関する政治論文（ラテン語手稿、1641 年）

以上に加えて、筆者が確認した 268 通に及ぶアマーティ一族によって認められた書翰により、彼らがコロナ家の各所領において、役人として活動していたことが明らかとなった。したがって、アマーティ一族とコロナ家との関係性に鑑みれば、シピオーネ・アマーティがコロナ家家臣として活動していたことは、もはや必然というより他ないであろう。

上記のようにアマーティ関連史料を具に見ていくと、アマーティがコロナ家の家臣として活発に活動していたことを窺い知ることが出来る。また、彼が慶長遣欧使節と邂逅する以前、つまり 1615 年にマドリッドで執筆を進めていたタキトウスに関する政治論文と、「手稿」集に収められているタキトウスに関する政治論文（1641 年）との間に何らかの関連性があることも指摘しておきたい。次章ではアマーティの史料を取り上げつつ、

* 10 この議論の詳細は、拙著「コロナ家と天正・慶長遣欧使節—コロナ家の日本関連情報収集の視点から—」（『スペイン史研究 28 号』、2014 年、スペイン史学会）を参照されたい。

彼の経歴、使節における役割を考察していきたい。

2 新出史料に見るシピオーネ・アマーティ

2-1 慶長遣欧使節邂逅以前のシピオーネ・アマーティの経歴

コロンナ文書館における調査で発見した史料の中に、「ヴェーロリ司教区におけるシピオーネ・アマーティ博士昇進についての事由書」*¹¹と呼ばれる手稿がある。経歴不詳のヘースス・マリアなる人物によって書かれたこの史料は、8葉で構成されており、前半3葉ではヴェーロリとコロンナ家との紛争解決に不可欠な人物たるアマーティを速やかに現地に派遣すべき旨がイタリア語で訴えられている。後半5葉では、1583年の出生から1620年代の経歴のあらましがラテン語で綴られている。彼の経歴をまとめると以下ようになる。なお、議論を進めるに当たって、末ページ別表の『「事由書」に見るシピオーネ・アマーティの経歴』も参照されたい。

シピオーネ・アマーティは1583年12月6日、トリヴィリャーノに出生。1598年には戦役に従軍する聖職者であった*¹²。14年をかけてラテン語、法学（聖・俗）を修め、1606年にはイエズス会ローマ学院においてアントニオ・サンタレッコから道徳神学「良心例学」の講義を受けている*¹³。また「サンタ・ウマニタリア」アカデミー（Accademia Santa umanitalia）にも所属しており、タキトゥスの講義を担当した。1613年、司祭に叙階。博士号取得後は、アスカニオ・コロンナ枢機卿のラテン語及び使徒書翰の家庭教師となった。マルティノ・コロンナの治めるナポリへ赴いた際には、現地の紛争解決に尽力、マルティノ・コロンナの息カミッロの家庭教師も努めており、タキトゥスとティトゥス・リヴィウスについて講義している。

アマーティはタキトゥス著『歴史』『年代記』についての政治学的論考、及び『イタリア統治における十二状況』を執筆。これらの著作は、上役の再検討・承認を経て、スペイ

*¹¹ Jesus maria, *Considerazioni civili sopra della promotione del Dottor Scipione Amati al Vescovato de Veroli*. 「ヴェーロリ司教区、シピオーネ・アマーティ博士の昇進に関する事由書」以下「事由書」と略す。コロンナ文書館蔵、「一般索引・一般目録」集、トリヴィリャーノ書翰集、請求番号 III TD

*¹² 前掲「事由書」三表 "Idem di Anno i598. ad scriptus est militia' Clericali dein tonsura et habito oblongo semper usus."

*¹³ 前掲「事由書」三表 "Casus et Conscientia' sub Patre sa'ctarillo in Societ. Colleg. audivit." 『ローマ学院の歴史』325ページ (*Storia del collegio romano*, Villoslada, Ricardo Garcia, Pontificia Università Gregoriana, Roma, 1954) には、サンタレッコは、1604年から1607年にかけて道徳哲学（良心例学）の教授であったとの記載がある。つまり、*Societ. Colleg.* はローマ学院を指すものと思われ、従ってアマーティもローマ学院及びイエズス会に関わりがあったと考えられる。

ン当局から出版許可を得ている*¹⁴。一方で彼はシチリア王国においてサンタ・クルス・マルキオーネにラテン語の政治論文*¹⁵を献呈、講義した。以上のように「事由書」内に記載されているアマーティのキャリアを概観していくと、聖職者でありながらコロナ家の家臣として忠実に仕えていたことがわかる。とりわけ、コロナ家において人文学の家庭教師を努め、政治・歴史関連著作の執筆を精力的にこなしていたことが窺える。では、彼の政治・歴史に対する関心は慶長遣欧使節とどのように結びついていたのか。次項ではこの視点に基づいて見ていきたい。

2-2 アマーティと慶長遣欧使節の邂逅

本項は、アマーティと慶長遣欧使節との関係を解き明かすのに重要である故、「事由書」を丹念に追い、不鮮明な経歴に関してはアマーティがフィリッポ1世に宛てた書翰等、他の史料から適宜に情報を拾い上げながらアマーティの慶長遣欧使節における役割を概観する。

慶長遣欧使節との邂逅直前のアマーティは、マドリッドに長期滞在中であった。1610年12月24日にローマより、1614年12月13日にマドリッドより書翰をフィリッポ1世に宛てているため、コロナ家の意向のもとに、この数年の間にマドリッドに赴いたものと思われる。マドリッドでの逗留先は、ヴィットーリア・コロナ・デ・カブレラの邸宅であり、ここでアマーティがタキトゥスに関する政治論文を執筆し、その出版準備を進めていたことは冒頭でも触れたとおりである。ヴィットーリアは、フィリッポ1世の叔母に当り*¹⁶、1586年に海軍提督ルドヴィーコ・エンリケ・デ・カブレラ3世(Ludovico III Henriquez de Cabrera, ?-?)のもとに嫁いでいる。アマーティの慶長遣欧使節通訳兼折

.....
*¹⁴ 前掲「事由書」三裏“Sensus Politicos super Annales Cornel’ Tacito. et Historias, nec non documenta status duodeci’ super Regimine Italia conscripsit. Sunt revisa, et approbata ab ecc.a ut edantur, Ea, Hispaniaru’ ad Regia’ profectus, Regiu’ Privilegiu’ i’primendi obtinuit.” 前述したように、『伊達政宗遣欧使節記』の「読者へ辞」末尾にも同様の記述が認められる。「タキトゥスの年代記について、その情勢、政治観念の諸問題を印刷する特許を当局から得た。その後、この使節に通訳兼報告者として貢献することになった。」”doppò hauer impetrato priuilegi da Sua Maestà Cattolica di poter imprimere alcune materie di stato, & i sensi politici sopra gl’ Annali di Cornelio Tacito, che spero nel Signore sarà presto, hebbi occasione di seruire a questa Ambasciata d’ Inteprete, e Relatore come l’ hò fatto con ogni fedeltà, e lontano da tutti gl’ interessi da Madrid sin’ à Roma:”

*¹⁵ 脚注7で示した著作。

*¹⁶ フィリッポ1世の父ファブリツィオ・コロナ (Fabrizio Colonna 1557~1580) とヴィットーリアが兄妹関係にある (双方の父はマルカントニオ・コロナ2世)

衝役への就任は、ヴィットーリアの推薦^{*17}と、彼女の従姉弟^{*18}に当りスペイン宮廷に仕えていた教皇使節アントニオ・カエターニ（Antonio Caetani, 1566~1624）の強力な後押しのもとに結実したものであった^{*19}。

慶長遣欧使節のマドリッド滞在期間は、（1614年12月20日～1615年8月22日）であるため、ヴィットーリア、カエターニ両人の推挙のもと、慶長遣欧使節とアマーティが邂逅した時期は、慶長遣欧使節がマドリッドを出立する直前の1615年8月ごろと考えるのが妥当であろう。

ローマにおいてアマーティは、使節の動向に絶えず気を配り、任務を全う^{*20}、予め用意していた祈願文を付して『慶長遣欧使節と奥州国の歴史』を編んだ。衆目が集まるなか、彼はこれを公式にパウルス5世に献呈し、その褒美として75ドゥカートを拝領^{*21}、さらには『日本王国、帝権における博物、宗教、政治』なる小冊子を執筆、ボルゲーゼ枢機卿に献呈したと記録されている^{*22}。その後、使節随行人としての功績が認められ、ローマ教

.....
*17 前掲書「伊達政宗遣欧使節記」, 38, 71頁; 原文47頁, Al Lettore 参照, 「マドリッド滞在中に教皇大使カエターニ卿, 及びメディナ・デル・リオセコ公兼モディカ伯爵夫人ヴィットーリア・コロннаの要請で使節通訳兼折衝役に就任」。“riceuendo per Interprete, e per negotij dell' ambasciata il Dottor Scipione Amati Romano, a istanza di Donna Vittoria Colonna Duchessa di Medina de Riosecco, e Contessa di Modica; e di Monsignor Nuntio Caetano, facendolo Gentil'huomo di sua tauola;”

*18 アントニオ・カエターニの母アグエシナ・コロнна (Agnese Colonna) が、アスカニオ・コロннаの父マルカントニオ・コロнна2世 (既述) と兄妹関係にある。

*19 前掲「事由書」四表 “Antonij Caetani Nu'cij Ap.li in Regia Hispani () off.o, legatoru' Iaponesiu' Regis Voxij in vele Roma' apud Paulu'. V. contendere volentiu' Interpres et legationis conductur eligitur a' Madrido usq' .”

*20 前掲「事由書」四表 “Roma se'per in itinere invigilavit ut comes et prefuit ut interpres.” アマーティの通訳兼折衝役としての役割が、プファリーニによるフィリッポ1世宛の書翰 (1615年10月20日、ローマ発、フィリッポ1世書翰集、コロнна文書館蔵) に明記されている。しかしながら、アマーティの通訳として役割に関しては、依然として議論の余地がある。「ここローマに日本使節が到着、シピオーネ・アマーティ博士もラテン語通訳として到着した。」“Qua in Roma e Arrivato uno Ambasciatore Giapponese a st.se se a e venuto D. Scipione Amati per interprete nella lingua latina”.

*21 前掲「事由書」四表 “Roma edidit Historia legationis et Regni Regis Voxij una cu' oratione precu' dem confecta, et in pub.co consistorio habenda Paulo.V. P. Mar.o dicavit. A sa'ctitate sua Portione' 75. ducatus auri de auro accepit.” 『奥州国、使節の歴史』 *Historia legationis et Regni Regis Voxij* は、『伊達政宗遣欧使節記』 *Historia del regno di Voxu del Giappone* を指すものと思われる。

*22 前掲「事由書」四表 “Libellu' de state Naturali, Religioso et Politico Iaponici Regni et Imperij Ill.mo D. card.li Burghesi dicavit, donavit.” この小冊子 *Libellu'* は、「日本略記」 *Breve ristretto delli tre' stati Naturale', Religioso, e Politico del Giappone*. を指している。つまり、ラテン語名とイタリア語名がほぼ一致していることにより、「日本略記」がボルゲーゼ枢機卿に献呈されたのは明らかといえる。

皇よりローマ市民権を授与された*²³。

使節一行と別れた後は、アラートリ (Alatri)、トリヴィリャーノ (trivigliano) 等において主席司祭、司教代理を歴任、同時にコロナナ家の家臣として、その領内を行き来した*²⁴。またアマーティは資料編纂員としても活躍しており、トレント公会議文書の一覧表を、簡便にして有用なものとしてまとめ上げ、ローマ文書館管轄下で著名な文書群を収めた文書館の設立に奔走したとされる*²⁵。以上が「事由書」内に見られるアマーティの略歴である。

2-3 慶長遣欧使節以降、コロナナ家家臣として、聖職者として

本項では「事由書」に掲載されていないアマーティの活動を、1620年代後半以降を中心に、彼が認めた書翰を基に追っていきたい。

まず、アマーティからフィリッポ1世等コロナナ家有力者に宛てられた書翰に見られるアマーティの肩書に着目してみたい。17世紀の書翰は押し葉べて、書翰の本文末尾の署名及び、書翰裏側の差出人には同時に当時の肩書が併記されていることが多い。コロナナ文書館に残されている最も古いアマーティ書翰は1609年に書かれたものであり、この時にはまだ肩書きは無い。博士 (Dottore, Dott. Dott.^{ro}) の肩書が初めて表れるのは1615年であり、この頃、つまり慶長遣欧使節との邂逅前後に博士号を取得したと思われる。「博士」の肩書は以降、アマーティが認めた最後の書翰となる1653年に至るまで最も多く使用されている。

次いで表れる肩書きが、1622、23年の書翰で記されている司祭長 (Arciprete) であり、1630～1638年に頻繁に使用されている肩書きが、司教総代理 (Vicario Genolare) であった。アマーティの書翰群から察するに、コロナナ家所領の一部であった、アラートリ司教区の司教総代理だった期間が長かったものと思われる。そしてとりわけて重要な肩書きが、1634、35年の書翰に集中して見られる主席書記官 (Protonotaro) である。これは単なる書記を指すのではなく、教皇庁の7人の最高記録官に許される称号、教皇庁書記

*²³ 前掲「事由書」四表 "Iaponica legationis Historicus, et interpres à Paulo. V. et Populo Romano pub. co in consistorio nobilitatis Privilegio Civitate Romana donatus est." 実際にはローマ市民権は、ローマ市元老院より授与された。

*²⁴ ジェナッツァーノ (Genazzano)、パレストリーナ (Palestrina)、パリアーノ (Paliano)、トリヴィリャーノ (Trivigliano) 等々。

*²⁵ 前掲「事由書」四表 "Concilium Tridentinu' in Tabulam satis brevi', et perutilem redigit, Notorios auctoritate Romani Archivij creavit."

長 (Protonotaro Apostolico) を指している*²⁶。このように書翰中に認められるアマーティの肩書を追っていくと、博士号取得後、聖職者として着実なキャリアアップを重ね、その最盛期が教皇庁書記長の称号を得ていた 51-52 歳頃であったことが浮き彫りとなる。

アマーティは 1620 年代より継続してコロナ家の文書整理に深く携わっていた一方、1623 年にフィリッポ 1 世の息子で当時 17 歳のカルロ・コロナ (Carlo Colonna, 1606-1686) に政治を講義し、タキトゥスについて多少、自身の所見を述べたとの記述がある*²⁷。「事由書」にも見られることだが、アマーティは一貫してコロナ家の家庭教師も務めていたことが他の書翰からも見て取れる。

当然ながら使節折衝役としてのアマーティの手腕は、この頃にも遺憾なく発揮されており、司教のコロナ家領内巡察の際には、書翰を通してその綿密な打ち合わせをフィリッポと交わしており、雑事をそつなくこなしていたアマーティの働きぶりを窺い知ることができる*²⁸。

またバルベリーニ家に嫁いだフィリッポ 1 世の娘アンナの男児出産の折 (1630 年) には、それが御家の安泰に結び付くことに触れながら、フィリッポ 1 世に慶びの言葉を寄せている*²⁹。1634-35 年ごろにはコスモ・ボンテンピと共にパリアーノのコロナ文書館再整理に関与し、収蔵する文書の選定、目録作成はおろか、文書館の門の鍵の数等、文書館のきめ細かい部分にまで注意を払っていた*³⁰。とりわけフィリッポ 1 世宛書翰のなかでボンテンピは、「文書館に収める目録作成にアマーティが非常に尽力し、迅速に整理された目録は簡便で秀麗ですらあった」と極めて好意的な評価を残しており*³¹、アマーティがその優秀さゆえに他のコロナ家家臣からも絶大な信頼を得ていたことがわかる。

1630 年代から 1640 年代にかけては、これまで以上に、コロナ家所領の礼拝堂に

*²⁶ Scipione Amati *Censura al Maestro di Camera di Francesco Sestini da Bibiena del dottor Scipione Amati Protonotario Apostolico*, 1634.

*²⁷ パリアーノ発信、1623 年 4 月 28 日、フィリッポ・コロナ 1 世書翰集 原文イタリア語、コロナ文書館蔵。“Hierì giovedì cominciai à servir’ al S.re D Carlo con un discorso politico, e poi se dichiarò un poco del Tacito..”

*²⁸ トリヴィリャーノ発信、1625 年 6 月 7 日、フィリッポ 1 世宛、トリヴィリャーノ発信書翰集、原文イタリア語、コロナ文書館蔵。

*²⁹ トリヴィリャーノ発信、1630 年 7 月 14 日、フィリッポ 1 世宛、トリヴィリャーノ発信書翰集、原文イタリア語、コロナ文書館蔵。

*³⁰ 関連史料が、フィリッポ・コロナ 1 世書翰集 (コロナ文書館蔵) に収められている。アマーティによる書翰 3 通 (1635 年 5 月 13 日付 2 通、5 月 16 日付 1 通、全てパリアーノの文書館より発信)。

*³¹ パリアーノ要塞発信、1634 年 8 月 14 日、フィリッポ・コロナ 1 世宛書翰集、原文イタリア語、コロナ文書館蔵。“fù subito dato principio al nuovo inventario, che non straordinaria diligenza, et fatica di esso Amati, tenendo ordine facile, et nobile…”

おける管理や式典の挙行に、深く頻繁に介入していた形跡が多数の書翰に見受けられる。パリアーノのサンタンドレア教会 (Chiesa di Santa Andrea) に設えられているサンタ・ルクレツィア礼拝堂 (Cappella di Santa Lucretia) での記念式典における式次第を作成する*³² 一方、1646年7月18日にパリアーノから枢機卿ジローラモ・コロナに宛てた書翰では、パリアーノのマドンナ・ディ・ザンカーティ礼拝堂 (Cappella della Madonna di Zancati) 保護に際し、公正証書の手続きについて言及しており、法学を修めた実務家としての一面も垣間見せている。

1642年8月10日にマルカントニオ・コロナ・ジョーエニ5世に宛てた書翰*³³ では、長く病に伏せていた旨が記されているが、その一方で彼の歴史理論が極めて明快に論じられており、それを軸としてコロナ家の歴史をどのように記述されるべきかの議論が広範に展開されている。62歳となり、病に伏せていてもなお衰えることない、アマーティの著作意欲をここに見ることができよう。

以上のように、慶長使節の折衝役という大役を担って以降のアマーティは、教皇庁に太いパイプを持った、コロナ家にとって欠かすことのできない重臣へと成長していったことがわかる。とりわけコロナ家の折衝役として一層の実績を重ねつつ、法律家と歴史学者の立場から政策提言も行っていることから、慶長遣欧使節での経験、『伊達政宗遣欧使節記』や「日本略記」の執筆が後の彼の人生に少なからず影響をおよぼしていたことは間違いないと思われる。

3 慶長遣欧使節及びヨーロッパ外交舞台における シピオーネ・アマーティの役割

3-1 インテリジェンスとしてのアマーティ

アマーティの経歴・背景については、その関連史料の乏しさから、取るに足らない情報と考えられてきた。彼がソテーロの伝聞を基に慶長遣欧使節に関する報告書を認めたにすぎず、使節にとって重要な人物ではなかったと考えられる傾向があったからである。しかし「事由書」の記述から、アマーティの使節における役割に再検討を加えると、別な可能性が見出され得る。

「事由書」において、慶長遣欧使節の動向をパウルス5世に説明する段では、「アマー

*³² 「サンタ・ルクレツィア礼拝堂記念祝賀式典報告」"Relazioni dell' Anniversario celebrato nella Cappella di S.ta Lucretia" フィリッポ・コロナ1世宛書翰集、原文イタリア語、コロナ文書館蔵。

*³³ パリアーノ発信、1642年8月10日、マルカントニオ・コロナ・ジョーエニ5世宛書翰集、原文イタリア語、コロナ文書館蔵。

ティは秘密とされていた使節の目的、隠匿されていた奥州国の政治状況について秘密裏にパウルス5世に報告している。なお、これらの情報は匿名人物の主導によって編まれたものであり、アマーティの他に教皇側近シピオーネ・コベッルチオ、ジョエ・バプティスタ・コスタクートも使節派遣の真実をよく心得ていた^{*34}と、記されている。なおこの一件については、「伊達政宗遣欧使節記」第26章にも「(ボルゲーゼ) 枢機卿は教皇陛下の侍従官である、いとも尊きコスタグート殿とパオロ・アラレオーネ殿に、使節を接待する準備をし、しかるべき交誼を尽くすよう命じた。そこで両人はアラチェリ修道院に足を運んで、信任状を持って派遣されたフライ・ファン・ソテロ神父 (Padre Fra Giovanni Sotelo Fratello) とシピオーネ・アマーティ博士と協議し、使節と随行員一行についての情報を収集した^{*35}とする記述が認められる。アマーティが著した『遣欧使節記』の記述では、「事由書」と同じ出来事が別角度から述べられており、アマーティ自身の使節に対する深い関与が仄めかされているものの、その後の出版とパウルス5世への献呈を意識してか、若干控えめに記されている印象を受ける。一方で「事由書」に至っては、先述した通り推薦状の一種である故、誇大な記述となっている可能性は否定出来ないが、それを割り引いてもなお、アマーティの使節に対する積極的な関与はおろか、必ずしも使節側の人物ではなく、密かに教皇にも通じ、使節の内情を探っていたことすら読み取ることができる。

これら両記述を比較すると、アマーティが使節折衝役として使節一行と積極的に関わり、使節の真実を知る立場として教皇パウルス5世と使節との間に立ち、いわば外交的役割を担った人物であった可能性が浮かびあがってくる。彼が在マドリッド駐在教皇庁大使アントニオ・カエターニの推薦を受け、使節通訳兼折衝役の任を仰せつかったという事実と併せて整理すると、既にこの時にパウルス5世から、使節関連の情報収集を託されていた可能性も否定出来ない。言うなれば、使節の世話をしつつ、使節側の人間を装いながら、実は教皇側のインテリジェンスとして策動していたとも解釈することができるのである。使節随行員を務めていた際に、使節を差し置いてパウルス5世と容易に接見できていたことに加え、後年アマーティが教皇庁首席書記長に就いたことに鑑みても、この推

.....
^{*34} 前掲「事由書」四表 “Pro expedienda legatione Paulu'. V. de secretiori legationis sensu, ac politico Regis Voxij arcano, scripto quodam satis erudito, et secretu' informavit, Scipione Cobellucio, et Joe' Bap'ta Costacuto tantu' conscijs.” 慶長遣欧使節は、奥州への宣教師派遣、メキシコとの通商関係立を目的に派遣された。しかし日本でのキリシタン弾圧、奥州を治める伊達政宗が日本の一領主にすぎないこと等々、スペイン宮廷は把握しつつあった。当然ながらスペイン宮廷との外交交渉は不調に終わり、使節一行はそれらの仲介をカトリックの権威であるパウルス5世に求めたのであった。これらの情報が使節にとって不都合だったのはいうまでもない。アマーティは、使節を主導したフランシスコ会士ルイス・ソテロ、及びスペイン宮廷の側近から以上のような情報を得るとともに、それらをパウルス5世に伝えたものと考えられる。

^{*35} 前掲書『仙台市史』所収、「遣欧使節記」77頁；原文55頁抜粋。

測はあながち間違いとは言えないはずである。

一方で先述のとおり、アマーティを使節折衝役に推挙したアントニオ・カエターニは、ヴィットーリア・コロナと従姉弟関係にあり、マドリッドにおいては相応の行き来があったものと推察される。ヴィットーリア・コロナとアントニオ・カエターニとのあいだで何らかの話し合いの場がもたれ、1615年8月頃にあったと思われるアマーティの使節通訳兼折衝役推挙に至ったと考えるのは、それほど的外れではないと思われる。

そして、アマーティ推挙に際し、ヴィットーリアの甥にあたるフィリッポ1世の意向も多分に加味されていた可能性も否定できない。ここで今一度、フィリッポ・コロナ1世の経歴を振り返ってみよう。フィリッポ1世は、アマーティが20代から50代にかけてコロナ家家臣として最も活躍した時期に多くの書翰を宛てた相手であり、慶長遣欧使節イタリア来訪時のコロナ家当主でもあった。コロナ家はナポリ近郊に多くの領地を抱えていたことから、かねてよりスペイン宮廷の結び付きを強めていた。フィリッポもまたスペイン国王フェリペ3世(Felipe III, 1578～1621)に出仕していた時期があり、フランドルやドイツでの戦役にも度々従軍し、各地で軍功を重ねている。パリアーノのコロナ家当主に就いてからは、領内の飢饉対策など疲弊しきった領地の改革に着手、外交面でも他のローマ近郊の有力家系や教皇との関係改善に努めるなど、軍事、内政、外交と多方面に互って斜陽に差しかかったコロナ家の立て直しを図った人物であった^{*36}。

フィリッポ1世のもとへ各地から寄せられる書翰群では、フィリッポ1世が頻々と慶長遣欧使節の探っていた形跡が随所に認められる^{*37}。とりわけニコラス・ダネオ(Nicolas Daneo)が1615年2月23日付でマドリッドからフィリッポ1世に宛てた書翰には、マドリッドでレルマ公を代父に立てた支倉の受洗式の様子が具体的に記述されている。この事実は、アマーティの使節通訳兼折衝役推挙の6ヶ月前から、フィリッポ1世が慶長遣欧使節の具体的な情報を入手していたことを示唆しており、ヴィットーリア・コロナとアントニオ・カエターニによるアマーティ推挙の過程において、フィリッポ1世の意向が強く反映されていた可能性もここに浮かび上がってくるのである。

さらには、コロナ文書館において、慶長遣欧使節を日本より引率してきたフランシスコ会士ルイス・ソテーロがフィリッポ1世に宛てた書翰^{*38}が発見されたことにより、これまで全く取り沙汰されることのなかったコロナ家と慶長遣欧使節との関係性が明白となっている。ソテーロは堪能な日本語を駆使して、日本で宣教活動を展開し、その交渉能

^{*36} Alberto M. Ghisalberti, *Dizionario biografico degli Italiani*, vol.27, Istituto della Enciclopedia italiana, Roma, 1960, pp.297-298.

^{*37} 拙著 前掲書「コロナ家と天正・慶長遣欧使節—コロナ家の日本関連情報収集の視点から—」32—34頁。

^{*38} ジェノヴァ発信、1616年3月3日、フィリッポ・コロナ1世宛書翰集、原文スペイン語、コロナ文書館蔵。

力により徳川家康等の権力者にも巧みに近づいていた。慶長遣欧使節は伊達政宗がメキシコとの通商関係を樹立するために企図されていたものとされているが、一方では東日本に司教座を置き、自らがその座に就こうとしたソテロの野望が、主たる原動力であったとする説が現在でも根強く存在する。したがってアマーティ推挙の裏で、コロナ家とも気脈を通じていた野心家のソテロの意向も密接に絡み合っていた可能性があることにも留意しておく必要がある。

上記を踏まえるとアマーティは、教皇庁、コロナ家双方から使節に関する情報収集を依頼され、双方のインテリジェンスとして活動していたと判断するのが妥当といえる。見方を変えれば、アマーティの使節随行人員選出を軸として、教皇庁、コロナ家、スペイン宮廷とのあいだで、慶長遣欧使節の情報を巡る争奪戦が静かに繰り広げられていたとも捉えられよう。慶長遣欧使節は、本来目的としていた外交交渉、あるいはソテロの思惑とは裏腹に、17世紀初頭ヨーロッパの複雑な政治的・外交的駆け引きという表舞台のただ中で期せずして踊らされていたのであった。

3-2 アマーティの政治思想と慶長遣欧使節

「事由書」でも触れられていることだが、アマーティは政治思想、歴史に関心があり、幾つかの政治関連著作、「日本略記」を遺しており、『伊達政宗遣欧使節記』に及んでは教皇に献呈後1615年末に出版を果たしている。本項では、アマーティの政治思想と慶長遣欧使節の関連性について、手短にはあるが論じていくこととする。

まず、「日本略記」とは如何なる内容であったのか。この著作は、日本の習慣、宗教、政治について書かれた報告書であり、79葉から構成されている。第一部「博物誌」12葉、第二部「宗教誌」22葉、第三部は「政治誌」44葉となっており、「政治誌」の量の多さから判断して、アマーティは日本の政治に重きを置いていたと思われる。彼の政治思想はキリスト教イデオロギーが一つの根幹となっており、その視点から、織田信長や豊臣秀吉を例に挙げながら、日本の政治状況並びに日本の統治システムを考察している。さらには日本の統治システムから、政治的教訓を引き出そうとしている一方で、暴力に塗れた日本の統治システム再編にはキリスト教的道徳観が必要であると結論づけている。

「事由書」において、ボルゲーゼ枢機卿への「日本略記」献呈のくだりは、慶長遣欧使節の関する記述内に記されている。ここから察するに、使節一行のローマ滞在（1615年10月25日～1616年1月6日）あるいは、使節一行がローマを発った直後に「日本略記」はボルゲーゼ枢機卿に献呈されたものと推測される。言い換えれば、慶長遣欧使節との邂逅が、『伊達政宗遣欧使節記』と同様に「日本略記」執筆へとアマーティを駆り立て、日本の政治について考察する一つの契機を与えたと解釈できよう。アマーティはこの邂逅を

積極的に自らの政治思想に取り入れた可能性は否定出来ないのである。一方で、「日本略記」を受け取ったボルゲーゼ枢機卿もまた日本の政治状況に関心を持ち、アマーティに「日本略記」の執筆を促した可能性があることも指摘しておきたい。

おわりに

以上のように「事由書」を中心としたコロンナ家史料を通して、シピオーネ・アマーティの背景及び慶長遣欧使節における彼の役割を明らかにしてきた。その結果、アマーティが聖職の身にありながら、コロンナ家の家臣として領域内の紛争解決に奔走するなどしていたことが判明、さらには交渉役としての能力が買われ使節兼折衝役に就くと共に、教皇、コロンナ家、スペイン宮廷とのあいだで情報仲介者として当時の外交舞台上で活躍していた可能性を指摘した。使節折衝役兼通訳というキャリアは、ヘースス・マリアが「事由書」内で取り立てて詳述するほどに際立つものだったのである。使節通訳兼折衝役という役割は、アマーティの折衝役としての有能さを示す上で、「事由書」内において、なおも効果的に機能していたのであった。

また、彼が認めた多数の書翰にも考察を加えていくことで、アマーティがコロンナ家の重臣として八面六臂の活躍をしていたことが明らかとなった。この点に鑑みると、若年のころより、その優秀さから一目置かれる存在であったであろうアマーティの慶長使節随行人員への選出は、単にマドリッドに逗留していたからという理由でお鉢が回ってきたわけではなく、フィリッポ1世、ヴィットーリア、カエターニ等の人物らによって周到に練られた人事であったということができよう。

以上のような議論を経つつ、シピオーネ・アマーティの経歴を深く掘り下げていくことで、典型的な人文主義者の異文化接触の過程、その背後に見え隠れするアマーティを梃子としたヨーロッパの有力者たちの異文化情報獲得競争の一端を多少なりとも解明できたと思われる。この点は本論文の最大の成果といえる。しかしながら現段階では、依然としてこの解釈を傍証する史料に乏しく、憶測の域を出ないのもまた事実である。情報収集に務めんとしたアマーティの役割及びアマーティを梃子とした権力者らの情報収集の目的の解明には、一層の史料分析が必要である。これは今後研究を進めていく上での課題としていきたい。

付録

「事由書」に見る シピオーネ・アマーティの経歴

- ・1583年12月6日日曜日 トリヴィリアーノ (Trivigliano) に生まれる。
- ・カミッロ・アマーティ (Camillo Amati) の親戚筋にあたり、母はニコライ・デ・クリドナ (Nicolaï de Chridona) の娘。
- ・この事由書が書かれた当時生きていたアマーティ一族には、アッピオ (Appio)、ポンペイオ (Pompeio)、マルカントニオ (MarcusAnt.s)、アマート (Amato) 等がいる。
- ・1598年 戦役に同行する聖職者となる。
- ・14年間に渡り、ラテン語、人文学、判事や弁護士に必要な法学 (聖・俗双方) を学び、その後教壇に立つ。イエズス会学院 (Societ. Colleg.) に学ぶ。
- ・1606年 イエズス会ローマ学院で、アントニオ・サンタレツロ (Antonio Santarello) よりイエズス会の基本理念とも言える「良心例学」の講義を受ける。
- ・サンタ・ウマニタリア アカデミー (Academia S. Humaitalia) に通い、タキトウスについて講義。
- ・1613年 司祭に叙階される。
- ・博士号取得後、枢機卿アスカニオ・コロнна (Ascanio Colonna) にラテン語や使徒書翰 (epistolis) を口頭で教授。
- ・マルティノ・コロнна (Martino Colonna) の治めるナポリ近郊に赴き、現地の紛争解決に尽力。
- ・マルティノ・コロннаの子息カミッロ (Camillo) の家庭教師も努め、タキトウスとティトウス・リヴィウスについて講義。
- ・タキトウス著『歴史』『年代記』についての政治学的論考、及び『イタリア統治における十二状況』を執筆、スペイン宮廷より、その出版許可を得る。数年間シチリアで過ごし、スペイン人サンタ・クルス・マルキオーネ (Santa Crus Marchione) に政治論文を献呈、ラテン語で議論した。
- ・スペイン宮廷に出仕する教皇使節アントニオ・カエタニ (Antonio Caetani) の推薦を受け、慶長遣欧使節通訳兼折衝役に就く。
- ・1615年11月23日 ローマ市元老院より支倉常長らとともにローマ市民権を授与される。
- ・教皇パウルス5世に『伊達政宗遣欧使節記』を献上。教皇より75ドゥカートを拝受。
- ・ボルゲーゼ枢機卿に「日本略記」を献呈。
- ・1616年 使節一行と別れた後、地元トリヴィリアーノに戻り、主席司祭に就く。
- ・1620年10月7日 アラートリ司教の死去に際し、総司教代理の任を3ヶ月努める。
- ・枢機卿アリアス・アスカニオ・コロннаより聖職禄及びその譲渡に関する勅書を授与される。

- ・聖パンクラティウスの称号を得て、アラートリ管区トリヴィリヤーノ、サンタ・マリア教会の主席司祭兼院長に就任。
- ・トレント公会議文書の一覧表を、勘弁にして有用なものとしてまとめ上げ、ローマ文書館管轄下で著名な文書群を収めた文書館の設立に奔走。

参考文献

- Scipione Amati Historia del regno di Voxu del Giappone : dell'antichità, nobiltà, e valore del suo re Idate Masmune, delli favori, c'hà fatti alla Christianità, e desiderio che tiene d'esser Cristiano, e dell' aumento di nostra santa Fede in quelle parti.E dell'ambasciata che hà inviata alla S^{ta}. di N.S. Papa Paolo V.e delli suoi successi, con altre varie cose di edificazione, e gusto spirituale de i lettori.. Dedicata alla S^{ta}. di N.S.Papa PAOLO V.Fatta per il Dottor Scipione Amati Romano, Interprete, & Historico dell' Ambasciata. In Roma, Appresso Giacomo Mascardi. MDCXV. Con licenza de' Superiori.
- Scipione Amati Breve ristretto delli tre' stati Naturale', Religioso, e Politico del Gapone, fatto, et ordinato dal Dottor Scipione' Amati Romo interprete', e' Relatore dell' Ambasciata del Re' Idate' Masamune' Re' de Voxu regnãte' nel Giapone, Fondo Borghese SerieI ,208-209, 51r-90r, conservato presso l'Archivio Segreto Vaticano
- Scipione Amati Censura al Maestro di Camera di Francesco Sestini da Bibiena 1634
- Scipione Amati Considerationi di stato sopra le cose d'Italia Roma, 1640, manoscritto
- Scipione Amati, Laconismo politico sopra il consiglio di coscienza, che combatte la ragione di stato, Roma, L. Grignani, 1648.
- Jesus Maria Considerationi civili sopra della promotione del Dottor Scipione Amati al Vescovato de Veroli, Trivigliano. Corrispondenza conservato presso l'Archivio Colonna
- 岩井大慧、岡本良知『元和年間 伊達政宗遣欧使節の史料に就いて』国会図書館支部東洋文庫、1956年。
- 『仙台市史 特別編8 慶長遣欧使節』宮城県教科書供給所 2010年。

Scipione Amati and the Japanese Mission of Hasekura Tsunenaga (1613-1620): his Background and Role from Documents in the Archive of the Colonna Family

Hitoshi OGAWA

Three years ago 2013 marked the 400th anniversary of the departure of the Keicho-period Japanese Mission to Europe, and interest in the Mission has been increasing as a result. The negotiator and interpreter for part of their tour was Scipione Amati (1583-1655?). He accompanied the Mission from Madrid to Rome (August 1615-January 1616), and published a report about it called *Historia del regno di Voxu del Giappone* (1615), while he left behind a report in manuscript about the political situation in Japan, *Breve ristretto delli tre stati Naturale, Religioso, e Politico del Giapone* (1616?). Although these reports are arguably the most important sources for the study of the Japanese Mission, little is known about Amati's background. I am particularly interested in *Breve ristretto* in which the emphasis is on the description about the Japanese political matters. According to the foreword of *Historia del regno di Voxu del Giappone*, when Amati had been writing the political paper about Tacitus at the palace of Vittoria Colonna in Madrid, he was elected as interpreter and negotiator of the Japanese Mission. In addition, he also glorifies the support he received from the Colonna family in all his undertakings in his other book. For the reason mentioned above and a look into his works, it is clear that Amati shared a relationship with the Colonna family. Relying on these hints, I made an attempt to research certain documents related to Amati in the Colonna Archive. I came unexpectedly upon 163 letters of Scipione Amati addressed to various Lords. This paper aims to fill in some of the gaps in knowledge about this important figure, by exploring Amati's personal background and his role in the Mission. Also, I will take this opportunity to introduce new historical materials about Amati, including a number of letters, recently uncovered at the Colonna archive, Subiaco.